

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02266

研究課題名(和文) 水戸藩と九州諸藩を中心とした近世前期の史書・記録類編纂と情報流通の研究

研究課題名(英文) A Study on Historical Records and Information Exchange in the Early Edo Period of the Mito clan and some clans in Kyushu

研究代表者

倉員 正江(長谷川正江)(KURAKAZU(HASEGAWA), Masae)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：70307817

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)に関する記述の伝播の様相について研究成果を得た。具体的には『和漢三才図会』の朝鮮出兵記事が、絶版となった軍書『九州記』に基づくこと、柳河藩主立花宗茂の活躍を描く軍書類の分析から、朝鮮を蔑視する内容が見られないことを考察した。さらに慶長の役に従軍した大河内秀元作写本『朝鮮物語』が、幕末の海防意識の高まりから注目され、出版された経緯を明らかにした。

また秀元と子息秀連の著作『光録物語』『糟粕手鏡』を基に、新たな小早川秀秋像を提示した。水戸藩に客仕した小早川能久の著作『翁物語』の記事を手掛かりに、三浦浄心著『北条五代記』の創作姿勢を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

豊臣秀吉の朝鮮出兵は、中国・朝鮮・日本を巻き込んだ16世紀最大の歴史的大事件であり、研究の蓄積も多岐にわたるものがある。本研究では従来言及されることの少なかった著作・記録類に焦点を当て、戦乱の記述の伝播と定着の様相を考察した。実証的な歴史学の観点からは、総じて近世期の軍書類は史料としての確実性を欠くとして看過されてきた。それでも当時の歴史観や歴史上の人物像の形成を知る上で、極めて有効な作品群であることを提示できたと、私は考えている。

研究成果の概要(英文)：I obtained research results on the aspect of spread of the description of Toyotomi Hideyoshi's invasion of Korea (War in Bunroku and Keicho/Imjin War). To be more specific, the article about the invasion of Korea of "Wakan Sansai Zue" was based on the out-of-print military book "Kyushuki", and the analysis of military documents describing the activities of Yanagawa feudal lord Muneshige Tachibana, I considered that I could not see disregarding description toward Korea. Furthermore, the publication of "Chosen Monogatari," a manuscript by Hidemoto Okouchi, who entered War in Keicho, was garnered attention as the awareness of the defense of the sea increased at the end of the Edo period.

I also presented a new image of Kobayakawa Hideaki, based on Hidemoto's books "Koroku Monogatari" and "Sohaku Tekagami." Using the article of Yoshihisa Kobayakawa's book "Okina Monogatari", who served the clan of Mito, I considered the creative attitude of "Hojo Godaiki" by Miura Joshin.

研究分野：日本近世文学

キーワード：和漢三才図会 朝鮮出兵 小早川秀秋 糟粕手鏡 朝鮮物語 大河内秀元 北条五代記 翁物語

1. 研究開始当初の背景

出版文化の確立は、日本の江戸時代を前代までと画期する最大要因と言える。近年江戸時代の出版関係の研究は日覚ましく進展し、筆者の場合は、従来研究の乏しかった近世期成立の軍書のうち『九州記』『戸次軍談』『九州諸將軍記』『西国盛衰記』等の出版経緯や絶版、本文入木訂正、板木切り継ぎ等の具体的事例につき、研究成果を発表してきた。従来の活字翻刻に頼る研究から脱し、諸本研究を踏まえた近世軍書研究の端緒が開かれたと言ってよい。筆者自身がその一翼を担ってきたとの自負はある。従来歴史研究からも文学研究からも等閑視されてきた近世軍書が、史実の歪曲や記述の偏向があってもなお、当時の歴史観やある藩士らの意識を反映した書として見直されつつあると考えている。

特に東アジア世界の再編をもたらした豊臣秀吉の朝鮮出兵(《日本》文禄・慶長の役/《韓国》壬辰・丁酉倭乱または壬辰戦争/《中国》万曆東征等)関係の記録は、各国研究者らの地道な努力や交流によって日中韓で発掘が進んだ。拙稿でも論じたが、国家間レベルでは自国有利の描写に陥りがちなのは当然ではあるが、日本軍であっても、どの陣営の視点に拠るかによって、かなり相違する記述が錯綜している。総じて同様の事が近世軍書全般に該当し、同一の史実・合戦・人物を扱いながら、作品により読後感や印象もかなり異なる結果となっている。作者の立場等、そうした相違が発生する原因を追究する対象を、さらに写本にまで広げると、研究の余地はいまだ多く残されている。

筆者は過去に3回にわたり科学研究費補助金の交付を受けた。いずれも「出版文化」をキーワードの一つと考え、『大日本史編纂記録』(以下『記録』)を主な資料とし、水戸藩の編纂事業とその影響を中心に研究を推進してきた。その過程において、版本の前段階として写本の存在を無視できないと考えるに至った。通俗的な視点もあるとはいえ、史実に基づく軍書は当然典拠がある。文字情報による場合、間書きによる場合、その併用が想定される。ただし、今日のような参考文献に言及するケースは少なく、序跋に典拠なる書を謳っている場合も架空の書としいケースも多い。以上の点から実証的な研究に至り難い面がある点は理解しているが、典拠となった写本の探究なしには、研究の進展が望めないという感を強くした。

一例として絶版となった軍書『九州記』の朝鮮出兵記事の典拠が、複数の佐賀藩士の著作、遡って文禄の役で従軍した僧是琢明琳の日記に拠ることが判明した、という筆者の発見はこの研究の方向性の可能性を実感させたと言える。

2. 研究の目的

近世前期に成立した写本の史書・記録・軍書(軍記)・間書・武辺話類の成立事情を明らかにし、それらが刊行されるに至った事情、または版本に具体的な影響を与えた事例を考察するのが本研究の目的である。中世末期から近世初頭における豊臣秀吉の朝鮮出兵や関ヶ原の合戦を経た幕藩体制確立期以降は、多数の写本の史書・軍書が編纂された。その背景には各藩祖以下数代にわたる幕府・藩政への貢献を顕彰する意図、また泰平の世が持続するようになってから困難な戦国時代を回顧する風潮などがある。特に従来研究の乏しい写本作品類の編著者像、成立の前後関係・影響関係等を明確にする。

具体的には、朝鮮出兵関係軍書を引き続き研究対象とする。前回の研究計画調書にも記しながら、研究が時代的に幕末期にまで至らなかったという事情がある。今回は、幕末になって海防意識が高まると、朝鮮出兵に対する興味関心も高まった事実を照らし、時代的には「近世前期」の文献を中心とするが、幕末に至る研究成果を発展させることを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 写本軍書の調査・発掘が基礎的作業となるが、まずは加藤清正を始めとする朝鮮出兵時に活躍した戦国武将を中心に、江戸時代の評価に触れた文献を収集する。新井白石・荻生徂徠・本居宣長・頼山陽ら著名な学者らによる評価を分析し、泰平の世における戦国武将像や軍学の意味を考察する。日本最初の絵入百科全書として名高い『和漢三才図会』巻13所収朝鮮出兵記事が、日本人にどう影響したか、朝鮮通信使にどう享受されたかについて考察する。

(2) 写本『翁物語』に見える立花宗茂と小早川秀秋の確執等、秀秋が登場する軍書・記録類を収集して検討し、従来とは異なる秀秋像の構築を試みる。その際、大河内秀元著『朝鮮記(「朝鮮物語」)』を主たる対象とする。秀元が生前に執筆した写本『朝鮮記』の諸本調査を実施し、秀元によって増補され写本にて流布し、幕末の嘉永二年(1849)に至ってから刊行された背景を考察する。明治期になって本書が再版された事情、版元である江戸の本屋和泉屋善兵衛初代・二代による明治初期に至る出版活動、同時期の出版界の動向を考察する。

(3) 従来言及されることのない秀元の著作、写本『光禄物語』《自身の伝記》や、『糟粕手鏡』の余白に書き込まれた戦国武将や大名らの逸話を、翻刻・分析して紹介する。小早川秀秋についての貴重な証言が見られる。

(4) 小早川能久著写本『翁物語』(前掲書とは別本)に見える戦国~江戸時代初期の武将の逸話を整理する。その際、能久の師匠で甲州流軍学者としても名高い小幡景憲の実像、三浦浄心著『北条五代記』版本の享受のあり方を考察する。

4. 研究成果

研究成果は別紙の雑誌論文7件、招待講演1件に集約されている。後者は、どちらかと言えば前回までの研究成果を評価されて、柳川市主催のシンポジウムのパネリストとして招待されたものである。筆者の研究対象が『記録』を中心とした水戸藩の出版事業から、彰考館と関わりの深い朱舜水、柳河藩儒安東省菴、さらに柳河藩主立花宗茂へと広がったことで、朝鮮出兵へと研究対象と成果が拡大したと言える。この点は、今回の研究成果を自己評価する上での前提として明記しておきたい。

7件の論文の研究成果を中心に、研究成果の新知見を以下に記す。

(1) 日本軍が大勝したことで著名な文禄の役「碧蹄館の戦い」の記述における立花宗茂と小早川隆景の役割と活躍に関し、『中古日本治乱記』『毛利秀元記』『翁物語』二種等の写本の比較から、現行版本『太閤記』の記述は、宗茂の活躍を強調する改変がなされた可能性を示した。

(2) 絵入百科全書として著名な『和漢三才図会』(正徳三年(1713)序刊)巻13「秀吉公征朝鮮」記事の典拠が、『九州記』であること、また島津義弘を「鬼島津」、加藤清正を「鬼將軍」とする人口に膾炙した呼称は、朝鮮人や中国人ではなく日本人の創作による可能性が高いこと、この呼称は本書を情報源として後代から現代に至るまで流布したと見られること、を指摘した。従来『和漢三才図会』は主として本草学の面から言及されるが、こうした通俗史観の形成にも少なからず影響を与えたことを指摘した。

(3) 筆者は2014年11月開催「Korea in East Asian Culture」(於韓国延世大学校)フォーラムにて「1763年刊『朝鮮年代記』に見る朝鮮像」と題して発表した。これを発展させ『朝鮮年代記』が、通俗軍書『朝鮮太平記』のダイジェスト版であり、李舜臣の活躍を江戸期の日本人に印象付けたと予想されることを指摘した。

(4) 秀吉の第二次朝鮮出兵「慶長の役(慶長二年 1597 ~ 三年・韓国にて「丁酉再乱」)」に太田一吉に従って大活躍した三河出身の武将大河内秀元の伝記を、従来知られない点を含めて明らかにした。関ヶ原合戦時は、秀秋が家康に付くことを見越して従軍した。その戦功も手伝って、合戦後備前・美作藩主となった秀秋に召し抱えられた。慶長七年に秀秋が没した後は諸藩を転々とし、彦根藩致仕後は石清水八幡宮辺に住み、余生を送った。秀元の子息秀連は、父の一代記『光録物語』(従来「光禄」と表記される場合が多く、当初はそれに従ったが「光録」と訂正しておく)を寛文四年に完成させた。父からの間書きが基となっており、旧主秀秋を美化する傾向もなしとしないが、描かれた秀秋と家康、家臣らとの交流は従来の関ヶ原合戦、特に伏見城攻防や秀秋像を覆す内容であることを指摘した。

(5) 秀連が秀元宛の書簡等から抜粋して貼り込んだ『糟粕手鏡』の存在を明らかにした。京都大学附属図書館に所蔵され、画像公開されているが、注目すべきは余白の書き込みで、内容は主として秀元が語った戦国武将の逸話である。特に秀秋に関わるもの十種には、青年君主の颯爽とした言動が記され、従来の秀秋像を覆すものであった。また秀吉の遺誡・辞世が記され、北政所の侍女孝蔵主の手から秀元に渡された、秀秋宛てのものである可能性を指摘した。

(6) 大河内秀元著『朝鮮物語』の写本・版本の諸本調査を基に、写本成立の背景と流布、版本成立前後の状況と流布を考察した。『朝鮮物語』は秀元が慶長の役に従軍した際の朝鮮における実体験と日記を基に、寛文期(1661~)になってから成稿した書である。今回の調査で、東京大学史料編纂所蔵押小路家蔵写本が古態を示す点、写本に嘉永二年版本(「通俗日本全史」底本)の系統と「続群書類従」の系統の二種があり、後者巻末に本文の省略がある点、従来ほぼ未紹介の宮内庁書陵部蔵本「武辺叢書」系統の写本は、内容の概略は版本型と一致しているが宛漢字・表記にやや特殊な語彙や傍訓が目立つ点、版本には嘉永二年の刊記を持つ初版本(大本)と再版本(半紙本)があり、ともに伝本は多いが後者は明治期の二代目泉屋善兵衛の刊行とみなされる点、等の知見が新たに得られた。版本の序を執筆した儒者藤森弘庵が起用された事情、版元となった江戸の書肆泉屋善兵衛の初代・二代にわたる動向等、幕末から明治にかけての出版界の状況について考察した。版本の蔵版者となった糸魚川藩家老の佐治信については不明な点も多いが、和泉屋と縁戚関係にある可能性から積極的に出版に関わったとみられる点、早稲田大学図書館蔵『朝鮮物語』は依田学海旧蔵本で岩本贅庵の書入れがあり、知識人の間に外圧による海防意識が高まり、こうした時代風潮が『朝鮮物語』の好評につながった点も新たに指摘した。

(7) 小早川能久著『翁物語』の記述に、三浦浄心著『北条五代記』『三増合戦』(初版本・巻六の一)を、幕府の水軍を統括した向井直宗が批判したという箇所がある。同席した能久が書き取ったもので従来言及されたことはなかった内容だが、この記事の分析から、実際の『北条五代記』の内容とは異なっており直宗の誤解に基づく点、当時の軍書の享受の在り方や、後北条家の水軍を司る家柄に生まれた浄心の、幕府に対する心境を指摘した。

研究を進める間に、大河内秀元や小早川能久とその周辺人物の伝記的事項について、筆者は新知見を多く得つつある。これらは今後とも発展し得る内容であると見込まれる。単に個人の伝記に止まらず、戦国末期~近世初頭の時代的変革期に生きた人物の精神生活を窺い知る貴重な資料であると考えている。これらを基に、更なる研究成果を求めて精査を続ける所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 倉員正江	4. 巻 第16号
2. 論文標題 大河内秀元著『朝鮮物語』成立・出版についての諸問題 序者藤森弘庵と書肆和泉屋善兵衛とその周辺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 99-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員正江	4. 巻 212
2. 論文標題 小早川秀秋 大河内秀連著『光禄物語』を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 22～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員正江	4. 巻 15
2. 論文標題 大河内飛元・秀連の著作とその周辺 京都大学附属図書館蔵『糟粕手鏡』に見る小早川秀秋の逸話を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 159～182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員 正江	4. 巻 -
2. 論文標題 写本軍書類に見る朝鮮出兵時の立花宗茂と小早川隆景	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近世日本の歴史叙述と対外意識	6. 最初と最後の頁 26-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員 正江	4. 巻 94-1
2. 論文標題 『和漢三才図会』巻第十三「秀吉公征朝鮮」記事の典拠と加藤清正像	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員 正江	4. 巻 14
2. 論文標題 『朝鮮年代記』に見る朝鮮像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 107-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉員 正江	4. 巻 17
2. 論文標題 『北条五代記』における関東戦国時代評をめぐって 『翁物語』の三増合戦評を端緒として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間科学研究	6. 最初と最後の頁 106-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 倉員正江
2. 発表標題 水戸藩彰考館と安東省菴の交流
3. 学会等名 公開討論「安東省菴とその時代」（招待講演）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----